

有光教一著

朝鮮磨製石劍の研究

三 上 次 男

磨製石劍の問題は、北東アジアとくに朝鮮の考古学や古代史に関心をもつものが、何らかの形で必ずつきあたり、解決を求められる種類のものである。それほどこの特異な利器は、朝鮮の先史古代社会に、広くまた深く根をはつている。

磨製石劍（以下、石劍と略称）は、読んで字のように磨製の美しい石劍であつて、東南部滿洲・朝鮮・西部日本の金石併用期にそれぞれ製作された。中でも朝鮮半島で最も流行し、普遍的に製作使用されているので、問題の中心は朝鮮にあるといつても差支えない。

一たい、金石併用期の日本や滿洲では、種々の形態の土器（日本の場合は弥生式土器）や石器をはじめ、特色のあるさまざまな金属器をのこしている。そうしてその組合せも、地域ごとに、なかなか複雑である。

ところが朝鮮半島にあつては、同じ時代の土著民の遺跡にのこる遺物の種類や数量は少く、組合せも比較的簡單である。そのような性質の半島の金石併用期にあつて、特長ある遺物の首座をしめているのが、磨製石劍なのである。したがって半島のこの時代の社会の分析を、遺物の上から試みる場合、磨製石劍の研究は、解決の最も

重要な手懸の一を提供することになる。たとえば、原始墳墓の探求を試みようとしても、出土遺物の中心を占める石劍の性質がわからなくては、全面的な解決はできないのである。

半島における磨製石劍は、こうした地位にあるので、朝鮮考古学を志すものは、必ず深い関心をもつが、資料の蒐集がむずかしくて総合的な判断を下すのが困難であつたり、形式が変化に富んでいたりと、また石劍の祖形に議論が多く、その系統が明らかでなかつたりするので、明確な結論を出すことができず、これが久しく金石併用期の研究に渋滞の色を帯びさせていたのである。

こうした経緯のある朝鮮磨製石劍の問題と、正面切つて対決を試みたのが、有光博士の本書であるが、結果は、『梅原考古資料』中の豊富な朝鮮石劍資料その他を、巧みな資料操作によつて充分に駆使し、見事に困難な諸問題を解決にみちびいている。

四六倍版の本書は六章、一一八頁の本文と四三の図版から成つているが、以下、本書の内容を紹介しながら、博士の資料操作の方法や、取り扱われた諸問題、あるいは提出された結論について考えて見よう。

二

著者はまず緒言において、かつて行われた総督府治下の朝鮮考古学の研究は、主力が高塚古墳に集中され、他の分野が比較的閑却されたこと、およびこの分野の重要な一問題に金石併用期（著者の初期鉄器時代）における金属文化のことがあるのをあげ、本書においては大陸から波及してきたこの金属文化が、土著文化に対していか

に反応したかを取り扱いたいと述べている。磨製石剣はそのための一つの重要な示標としてとりあげられている訳であり、本書の基本的な観点は、ここにあるものと思われる。

第一章「石器時代文化と初期金属文化」はイントロダクションともいうべきで章であつて、両文化の接触の問題に焦点を合せている。朝鮮の新石器時代文化には、大別して櫛目文土器を示標とする文化と、赤褐色無文土器を示標とするそれとの二つの系統があり、前者の分布が狭いのに対し後者の遺跡は海岸・内陸を問わず、広く全鮮に分布し、普遍的である。なかでも西鮮の大同江流域とくに平壤付近、南鮮の錦江流域とくに扶余付近、洛東江流域とくに大邱付近、および慶州付近に集中的に存在するが、この文化は磨製石器の製作者のそれであり、同時に農耕者のそれでもある。

こうした赤褐色無文土器文化が用意されているところに、前三世紀のころ、大陸から金属文化が入るのであるが、これにはスキト・シベリア系のもと、戦国末から漢初にわたる中国系のものがある。中国系のもは青銅器と共に鉄器をも含んでいるが、出土数に於いても分布地域の広さの点でも代表的なものは銅剣と銅銜である。いずれにせよ、こうして輸入された卓越した武器の銅剣を、なお低い石器時代の段階にあつた土著人が模倣したのが磨製石剣である。その際、著者は、標式的な銅剣を出す遺跡から石剣を出さず、石剣を出す遺跡から銅剣を出さない事実——標準のものとは性質を異にする粗質のものを出す例はあるが——に注目し、金属器文化は征服者のものであり、土著民のそれとは一切関係がなかつたと論じているが、これは見通がすことのできない発言である。

「石剣の形式と分布」を考察した第二章は、本書の中でも、ことに精彩をはなつ一章であつて、著者は独自の形式分類を試み、これとそれぞれの形式の分布圏との関係を掘り下げつつ、すぐれた結論をみちびき出している。

朝鮮および日本の磨製石剣の形式分類については、前に梅原末治博士と高橋健自博士の案がある。しかし、この両者の分類法には一定の基準がない。

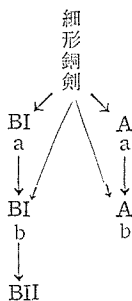
そこで有光博士は、基部の形を目安として、まずAⅡ有茎式、BⅡ有柄式、CⅡ無茎無柄式、DⅡ柳葉形、EⅡAの特殊形、の四グループに分けた。しかしこれだけでは不充分であるので、次に刃部の種の有無に注目し、有るものにa、無いものにbの符号をつける。またBの有柄式の柄部には二段のものや一段のものがあるので、前者をBI、後者をBIIとする。本書において研究の主対象となつているのは、A、Bの二形式であるが、このようにするとAa、Ab、BIa、BIb、BII（BIはbばかりでaはないから区別する必要はない）の五形式が設定できる。この形式設定が、石剣の祖形、変遷、地域別特質、その他全般的性格を考察し、これを解決に導く基礎となつているのである。

次に石剣の祖形となつた銅剣は如何なるものか、の問題にすすみ、従来提出されていた三つの説、すなわち一、スキト・シベリア系銅剣、二、中国系銅剣、三、細形銅剣のそれぞれを検討しながら、これが第三の細形銅剣を模したものであることを論断する。この論断を導き出すのが分布圏との関係すけであつて、その手ぎわは冴えていゝ。以下やや詳しく紹介してみよう。

さて磨製石剣はほとんど全鮮から発見されているが、とくに集中度の高いのは大同江下流域、漢江下流域、錦江流域、洛東江流域および慶州付近である。なかでも慶州付近は多く、出土地のわかる一六七本の石剣のうち五四本を出している。これと共に重要なのは、A形は西鮮に集り、B形は南鮮に集中することである。

ところが、細形銅剣もまた半島より多数発見され、しかもその分布と地域的集中の形は、石剣の場合と全く一致する。これに対しスキトシベリア式短剣は不確実なものを一例、また中国式銅剣も確実な出土例は一例にすぎない。このような点から見ると、石剣製作の原形となつたものは細形銅剣と考えるほかはない。

しかしそれにしても問題は残る。なるほど西鮮に多いA形が細形銅剣を祖形とすることに疑問がないにしても、南鮮のB形は細形銅剣には似ず、むしろスキトシベリア式銅剣の形に近いではないか。これに対し、著者はBI形は、劍把をつけたままの細形銅剣をうつしたもので、樋のあるaはその形をすなおに写したものであり、また樋のないBIbとBIは、BIaの退行形か、あるいは劍把を著装した上、鞘におさめた形を示したものであるとする。こうした著者の考えは、次のように図式化されている。



著者によつて解きあかされた石剣の形式推移の状態は、ちよつとわが國の平安刀とアイヌのヒゲベラの関係を見るようで面白い。

すれにせよ著実なこの祖形論は、いままで定説がなく、取扱いに困難を感じていたこの問題に、初めて頼つてよい解決を与えた観があつて、現在のところ、何人も肯定せざるをえないであらう。

この章には、この他、C・D・Eの各形式の祖形論や、各形式のより詳しい分布状態の考察がとりあげられている。

そうして最後に石剣の成立地と、地域別推移にふれ、中国文化の色彩のつよい銅劍銅鉞文化の一大中心地であつた西鮮で、これに似たAaがまず作られたこと、中国の直接支配から自由であつた南鮮地方に石剣の流行がうけつがれると、BIbとBIが特に顕著な発達をとげたことをもつてむすんでいる。

三

第三章「退行形の石剣」で論じてあるのは、石剣の形式推移、とくに成立期に見せた形式が退行してゆく過程についてである。

いうまでもなく著者の形式観からすれば、原形である細形銅剣に最も近いAaが最古の形式であり、BIaがこれにつづくということになる。これらの形式の石剣は発見数が少く、行われて期間も短いと考えられるが、それにもかかわらず、出土品中にはすでに退行形が現われているのは——樋の彫りの鋭鈍や莖の形式を比較考察すると——注意を要する。AaやBIaの退行形のものもある。

また樋のないAbやBIb、BIでは、彫りが鋭利で形の強い、また兵器として役立ちそうなものを先行形とし、それから漸次離れるものを退行形としているが、とくにBI形のもの、典型的な先行形のものから、極端に形式化した退行形のものまであり、後者は慶州と

扶余に集中している。BII形に退行形のものが多いのは、発見数の多いのと相まつて、その製作が長期にわたつて行われたことを示しているとい指摘している。

退行形の問題は、石剣の年代的および地域別性格を追求する上に、すこぶる興味があり重大である。

朝鮮発見の石剣は出土状況が明らかでないものが多く、それだけに性質を追求するのに困難を感じるが、幸い墳墓に副葬されているものがあつて、性質の解明に役立つ。第四章の「石剣を出す埋葬址」はこの問題をとりあつかつて居り、石剣が(一)組合せ式箱形棺、(二)石室、(三)積石塚、(四)支石墓の何れからも発見されること、A・B両式を出した埋葬址二八ヶ所の一覽表、および多少とも出土状況のわかる六遺跡について説かれている。朝鮮の原始墳墓には、その他甕棺や土壇墓があるが、いまのところ、後にあげた二つを除くすべての墓から発見されていることが知られ、また早くは原始墳墓としては初期に属する北方式支石墓関係の遺跡から、おそくは最末期に属する慶尚南道昌原郡熊南面の石室墳まで各時代に亘つて出土していることが解る。これによつても、石剣のカバーする社会と年代の幅の広いことが諒解できるのである。

こうしてようやく形式に関する考察をおわり、歴史的な諸条件をかえり見ながら、行われた時代や社会、あるいは地域的特質を総括することになる。第五章の「石剣の時代」がこれであつて、この章における著者の考えは大略次のようである。

石剣は、紀元前二世紀の終り、漢の四郡が朝鮮におかれる前から西鮮でみられた細形銅剣をまねて、まずAa形が西鮮で作られた。

西鮮のものは箱式石棺と結びついている。

西鮮で石剣の製作がおこると、つづいて中鮮の漢江地方で有柄石剣(B形)の流行がはじまる。B形石剣は、さらに南鮮においてすこぶる流行したのであつて、このことは南鮮の特長的なBIbとBIIが、朝鮮発見石剣の総数の八〇パーセントをしめることによつても解るが、同時にBIIは流行もながく、先行形から退行形の各種に及んでいゝ。そうして南方式支石墓から、これの発見されることが多いのは、石剣製作者と南方式支石墓と深い関係をもつていゝことを物語るといゝ。

石剣の流行は、それぞれの地域が鉄器時代に突入することによつて終末を迎える。半島が鉄器時代に入るのは、西鮮では、前二世紀末に楽浪郡が設置された事実に伴つていゝが、南鮮においては、はるかにおくれ、四世紀の後半の三国時代の開始期である。こうして鉄器の普及とともに、石剣と青銅器は姿を消すものと思われる。

一たい石剣を製作し使用した人々は、素文赤褐色土器文化を基盤とする農業社会を發展させた土著の人々で、磨製石器の製作に巧みであつた。青銅利器を知つてはいたであらうが、征服者である銅劍銅鉞類の使用とは全く接触がない。

著者はこのように結論つけた後、最後の第六章で、日本出土の石剣と比較し、これによつて朝鮮石剣をさらに浮び上らせるように努力する。

これによると朝鮮石剣の流行期とほぼ時を同じうする弥生時代に、日本でも銅戈を模したと思われる石戈(クリス形石剣)・鉄劍形石剣および僅かながらBIb・BII形が出土する。このうち石戈と鉄劍形

石劍の一種（著者の亜型Ⅱ）は専ら日本で行われた形であり、また、西日本から出る数少ないBI bとBII形は、朝鮮からの移入であろうと論じる。——BI bとBI形は南鮮の支配的形式である——。これとは別にBI aは、日本では全く姿を現わさない。

こうした状態を見ると、石劍は朝鮮と日本で共に製作されたとはいえ、形式には相当のちがいがあり、BI a、BI b、BIIこそ朝鮮で完成された朝鮮形石劍といえるものである。

四

本書の内容は、さらに多岐にわたり、複雑な問題をもふくんでいるので、すべてを伝えることはできないけれども、大要は以上のようだと思う。

精読し終えて、まずつくづくと感じることは、この労作が、よくよく考えぬかれ、練りぬかれた思考の集積だということである。いろいろな側面から考えるだけ考え、その結果だけが文字になっている、ということがよく解る。この書をまとめる直接の機縁は、梅原考古資料にあつたのであろうが、著者の朝鮮磨製石劍に対する深い関心は、二十数年前に溯ることを他の論文は教えてくれる。その間、さまざまな疑問に対する解決の努力はたえずなされていたのであろう。そうした永年に亘る問題処理への熱意と解決への努力が、ついにこの見事な労作を生むに至つたものと思われる。

こうして著者は形式分類の定型をつくり、つづいて細形銅劍と石劍の分布圏をオーバーラップするという新しい方法を巧みに使つて、石劍の祖形・地域別発達・年代問題などを浮びあがらせ、あるいは

性質の固定化に成功した。分類や祖形、その他地域的特色など、現在のところ、これ以上おおよそどうにも考えようはないところまで、近づいている。恐らく将来とも基準となるに違いなく、——CとEについては多少問題があるかも知れないが——筆者もこれに従おうと思つている。

本書の別の大きな功績は、朝鮮原始古代史の研究に、石劍の概念を持ちこむ便を与えたことである。すなわち三國時代以前の朝鮮土著社会は、石劍という用具を通じて見ると、巨視的には畫一的であり、その内部において種々の区別があることを教えた。この時代の社会は石劍という概念を通じて一応統括でき、その上で内部の違いを分析すればよいことにならう。これは不明の点の多い朝鮮原始古代史の解決に、一つの重要な手懸を与える。

朝鮮磨製石劍のもつ意義は以上のように大きいから、著者に対し、いくつかの願いと将来への希望はある。その一つは地域別特質と、年代別特長の関連の問題である。本書の第三章は主としてこれを取り扱つたところであり、その他随所にこの問題にふれてあつて、筆者は興味深くこれに接したが、将来さらに深く追求し、地域と形式と年代の三者の相関表を作成してほしいと思う。つまり、それぞれの地域に——道単位か、集中地単位。小さければ小さいほどよい——どのような形式の石劍が、どの時代からどの時代まで行われたかという点について、また、退行形の地方的性格と基準について著者の見解をより細かく教えてほしいのである。これは原始古代におけるそれぞれの地域文化を探る最もよい手段の一つになるからである。

このような願いは、筆者といえども、資料数が少く、出土状況の明らかでない現在、困難なことはよく解つてゐる。しかしこれは著者ならでの仕事であるし、また近ごろ黄海鳳山郡御水区の箱式石棺からBIaが、また慶南昌原郡鎮東面の南方式支石墓からBIIの出土したことが朝鮮の學術雜誌に報ぜられており、わが国でも伝慶州出土や伝金羅道出土その他のBII新資料に接したことがあるから、資料もしだいに累積するであらう。

これと共に知りたいのは石劍とほとんど必ず共出する磨製石鏃の性格である。朝鮮の磨製石鏃もまた半島に通ずる畫一性と、地域ごとの特殊な顔つきをもつてゐるに思われる。石劍と石鏃をとくに究め、両者の相関關係を明らかにすれば、石劍の性格は一層明るさを増すと共に、石劍文化の地域的性格に関する理解も深まることと思われ。

その他、地域の問題については、何故、西鮮ではA形が主となつたのに、南鮮ではB形のみが流行したか、その必然性についての著者の見解も聞きたかつたし、——BIaがAaよりおくれる理由や、B形の初期の発生地と流行地の關係なども少し積極的に知りたい——もつと広くは、石劍の祖形が細形銅劍とすれば、それと伴出することの多い銅鏃が半島で取りいれられなかつた理由——石劍の中には銅鏃の形に似てゐるのも二三ある——も、脇筋ながら聞きたいことの一つである。

聞きたいことは、他にもまだあるが、終りに一つつけたすと、磨製石劍社会と対立する銅劍・銅鏃社会を、著者は征服者の社会と規定している。これは重要な規定であつて、そうだとすると、朝鮮の

原始古代社会史は、これを軸として興味ある展開をするかも知れない。著者はこれをどのような性格の征服者と考へておられるのか、文字通りの外来武力征服者か、あるいは外来移住者か、も少し間口をひろげて土著民中の強力な支配者も含まれてゐるのか、を語つてほしいのである。これによつて石劍社会の性質も自ら定まつてくるであらう。筆者は、従来より他の点からも銅劍銅鏃文化中に外来的な支配者の要素を認めることに大きな魅力を感じていたのであるが、今一步、精密を期したく、裏付けの増すのを待つていたのである。

要するに、著者は本書において、考古学を通じて、朝鮮原始古代史の一つの重要な基礎を築きあげ、さらにその上に建てらるべき建築について、種々の緊要な問題を提供した。この建築は、つづいて著者によつて築き上げられるのが最も望ましいが、同時に朝鮮古代史や考古学の研究にたずさわるもの共に考えるべき命題であらう。なお、本文の中に挿図があれば、読者の理解を一層助けたであらうし、ナカゴ式・ツカ式の用語は有茎式・有柄式に統一すべきであらう。用語のうち一、二筆者と概念をことにするものがあつたが——例えば組合せ式箱形石棺や石室の性質——これは本文の論旨にはあまり關係がないから触れない。

最後に、この貴重な労作に対してなした筆者の紹介のしかたに、もし誤りがあれば許されたい。また著者に対す願望も、無理な注文であれば寛恕されんことを希つてゐる。

(B5版 本文一八頁 図版四三頁 昭和三四年一月 文華堂
発行 定価二、〇〇〇円)